

# 酒船石遺跡

第14次調査



2000年10月

明日香村教育委員会





第14次調査全景

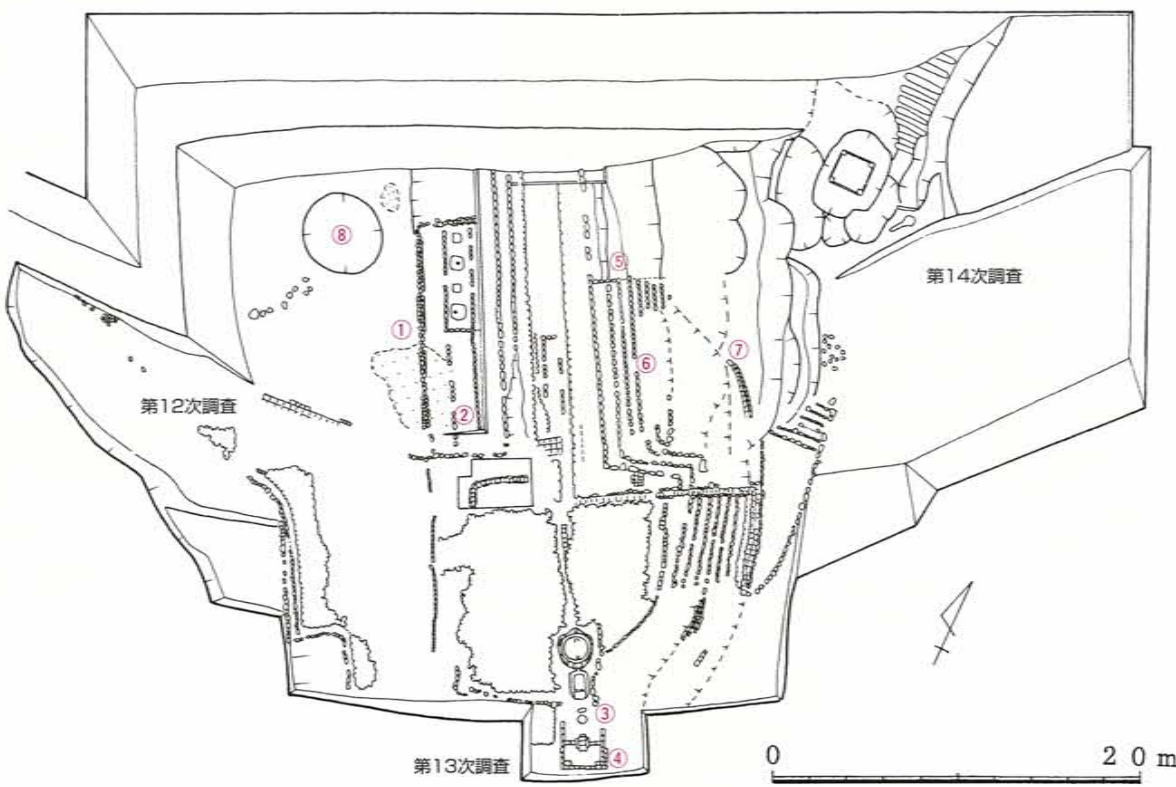


⑧ 石材廃棄土坑

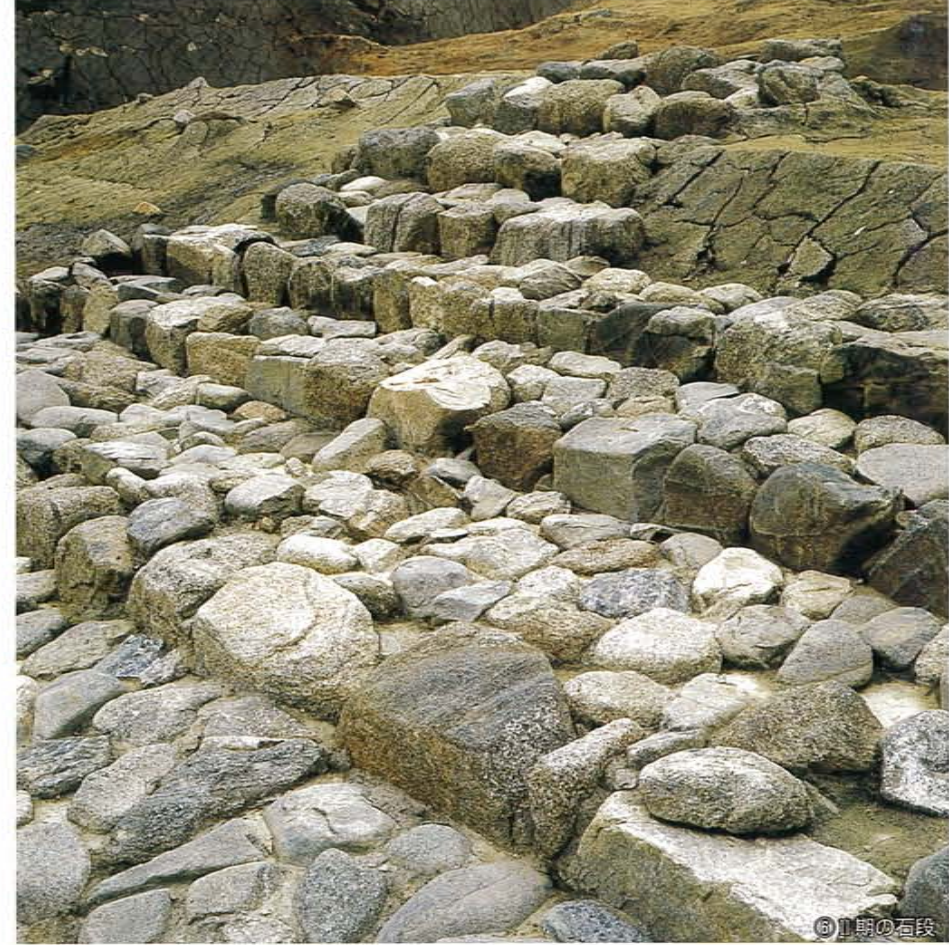


③ 1期の砂岩列

酒船石遺跡調査略測図



① 1期の石段・柱穴



⑥ 1期の石段



② 1期の石段



③ 13次水施設



④ 砂岩水施設(第13次)



⑤ 1期の石段・南北溝



# 酒船石遺跡 第14次調査

## 1. はじめに

酒船石遺跡の北裾の二つの尾根に挟まれた谷の部分で行った第12次調査では、亀形・小判形石造物の導水施設をはじめ、その周辺にひろがる石敷、両側の尾根斜面裾に施された砂岩石垣や階段状石垣が検出されています。酒船石の丘陵上に巡る石垣は、その位置や砂岩を使用することから、『日本書紀』斉明二年条にみえる「宮の東の山の石垣」「両槻宮」との関係が指摘されてきました。そして亀形石造物周辺は立地や導水構造からみて、祭祀などの儀式を行った場所ではないかと推定されてきました。その後、石造物の南側から砂岩を11段積み上げ、その北辺中央に取水塔を組み上げた湧水施設が検出され、水源から排水までの一連の導水構造を解明する成果も得ています(第13次調査)。今回の調査は第12次調査地の北側を解明するために約1200㎡にわたって行った範囲確認調査で、平成12年6月1日から実施しています。

## 2. 遺構の変遷

今回の調査では石段や南北溝・暗渠・柱穴などの遺構を検出しましたが、これらは大小多くの改修の跡がみられます。その結果、層位・重複関係・出土遺物から大きく5時期に大別されました。ここでは第12・13次調査で検出した遺構もあわせて、各時期ごとに概要を記していきましょう。

### 【Ⅰ期】 (7世紀中頃)

Ⅱ期以降の遺構のため、部分的にしか確認できていませんが、Ⅱ期の石段よりも古い石段を造る段階です。この石段南半部にはバラス敷を施していますが、北半部には柱穴が並んでいます。湧水施設は砂岩を6段目まで積み上げた低いもので、亀形・小判形石造物も現在位置より低い位置に据えられていたと考えられます。

### 【Ⅱ期】 (7世紀後半)

Ⅰ期の石段を埋めて、新たに石段や南北溝、階段状石垣を造営する段階です。南北溝は幅1.6mの石組みで、西側には3段、東側には10段分(高さ2.6m)までの石段が残ります。東の石段はその南で屈曲して、階段状石垣に取り付きます。湧水施設は5段分をさらに継ぎ足して11段(高さ1.3m)まで積み上げています。これに伴って亀形石造物と小判形石造物も現在位置の高さに据え直されます。

### 【Ⅲ期】 (7世紀後半～末)

Ⅱ期の遺構は引き続き存続し、新たに石造物の周辺12m四方に人頭大の石を敷き詰めた段階です。さらに湧水施設の西側にも幅2mの石敷を施し、西側の石垣の裾にも犬走状石敷を施しています。

### 【Ⅳ期】 (9世紀)

南北溝やその東西にある石段の下半を埋め、幅1.5～2.5mの素掘溝に掘り直した段階です。ただしこの溝の南1.5mは粗雑に積んだ石組みを積んでいます。

### 【Ⅴ期】 (9世紀後半)

Ⅳ期の南北溝を幅2mの素掘溝に掘り直す段階です。また、石造物の脇に小石を詰め込んでおり、湧水施設はすでに埋まっています。変わって直径50cmの木製曲物を設置し、井戸枠としています。

## 3. まとめ

今回の調査で亀形石造物の周辺約2000㎡を調査したことになります。ここでは大小多くの改修の痕跡がみられ、その造営から廃絶までの約250年間に5時期に区分することができました。特にⅠ期は斉明朝、Ⅱ期は斉明～天武朝の造営であることが出土土器から判明したことは重要です。また、一連の導水施設を中心に、尾根の斜面や底部には石敷や石垣が施されており、これまでに考えていた以上に閉鎖性が高く、人工的な空間であったことが判明しました。このことはこの空間が祭祀の場であったことを示唆するもので、今後は丘陵上の酒船石との関係が注目されます。